

---

# トリップ・マニュアル

那由多

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

トリップ・マニュアル

### 【Nコード】

N4762Q

### 【作者名】

那由多

### 【あらすじ】

ある日突然見知らぬ場所にいた ああ、これがトリップというやつか。

混乱より先に何となくそうってしまったのは、うちのお姉ちゃんが原因だ。

トリップした妹（＝わたし）と、要所要所出張ってくるお姉ちゃんによる、実演・解説付きトリップマニュアル。

\*BLは、作中のネタとしての扱いです。頻繁に出てはきますが、メインストーリーではありませんので、あしからず。

## 1-1、うちのお姉ちゃん、わたしのトリップ

うちのお姉ちゃんはちよつと変だ。

変・・・というか、世の中には多分、お姉ちゃんを表現するのにもっと適切な表現があると思うのだけれど、女子高生の私にはそれ以上の言葉が見つからない。読み進めていく中で、うちのお姉ちゃんにぴったりの表現を見つけた人がいたら、是非教えてほしいくらいだ。

さて、わたしが何をもって実の姉の異質性を訴えるかということ、それはお姉ちゃんが所謂『腐女子』である事に由来する。

『ああ、なるほど』とご理解ご納得いただけただけの方、ありがとうございます。ざいます。そしてご理解いただけなかった方の為に少しの補足を。腐女子とは：最近市民権を得てきた、男性同士の恋愛をこよなく愛する女性の総称。

これだけでも、世間一般から外れていることはわかっていただけると思うのだが、わたしが問題視しているのはそこだけではない。

腐女子だからお姉ちゃんは変なのではなくて、お姉ちゃんが腐女子なのに変なのだ。そのところ、詳しく説明させていただきたい。

お姉ちゃんは、腐女子な彼女たちの中でも『隠れ腐女子』というやつで、一般人を装って生活しているタイプだ。大学の時も、社会に出てからも、今も、お姉ちゃんの友達でお姉ちゃんが腐女子であることを知っているのは小学校からの友達であるともちゃんぐらい。因みにともちゃんは腐女子を卒業したらしい。卒業できるなんて、どこかのアイドルのようだ。

更に、お姉ちゃんは『夢見乙女』とやらも兼務しているらしく、そついった称号が増える度にわたしは彼女の将来が心配になるわけ

だが、当時既に立派な成人女性だったお姉ちゃんにとってみれば未成年の妹の心配なんて杞憂に過ぎないだろう。

マンガ・小説・ゲームをこよなく愛し、パソコンなしでは生きていけないと豪語するお姉ちゃんがどこへ行くこうとしているのか聞いてみたところ間髪いれず『異世界!』とのたまった、大人になるって何だろうと幼心に頭を抱えた微笑ましいエピソードもある。

話がそれだが、隠れ腐女子兼夢見早乙女であるお姉ちゃんは、それはそれは立派に擬態している。妹の私でも感心するぐらい、お姉ちゃんの外面は完璧だ。

その完璧な外面を可能にしているのが、お姉ちゃんの外見。すらりとした長身で、ヒールをはくと170cmを軽く超える彼女は顔も美人顔で、『モデルさんみたい』とわたしの友達から絶賛されていた。

確かに、お姉ちゃんはキレイ系の顔をしていると思う。身内の欲目を差し引いても。卵型のすつきりとした輪郭は、丸顔のわたしからみても羨ましい限りだ。

けれど、わたしはそれを妬ましいとは思わない。何故って、お姉ちゃんが今のお姉ちゃんになるために多大な努力をしているのを知っているからだ。

高校生の時のおねえちゃんは、背こそ高かったものの、体重は今の倍ぐらいあったんじゃないだろうか。所謂『デブ』だった。ころころ丸くて、髪を伸ばすと顔が丸く見えるからなんて今更な理由で短髪にしている、それがまるでお相撲さんのように見える程度には太かった。

そんなお姉ちゃんの転機は高校三年生の春。大学入学前の二カ月で死ぬ気ダイエットを決行したお姉ちゃんは見事に大学デビューを果たした。

細くなり、化粧をすることを覚えてからも、お姉ちゃんは努力を怠らなかつた。食事セーブに毎日のストレッチ、美肌を保つための高い化粧品代はお姉ちゃんのバイト代から出ていたし、服も同様、

サプリメント摂取もあたりまえ。メイク術の研究にも学業以上の熱心さを見せ、社会人になってからは給料の半分をつぎ込んで週一でエステ、月一で皮膚科に通ってアンチエイジングに努めているお姉ちゃんの最近の趣味は『自分』だそう。もういっすすごい。

そうやって仕上がった『お姉ちゃん』。湖面を優雅にすべる白鳥のごときお姉ちゃんを尊敬こそすれ、妬む要素はどこにもない。

働いている時のお姉ちゃんは『キャリアウーマン』の見本のような人で、高そうなスーツをパリッと着こなし、メイクはナチュラルに、髪型にも気を抜かず、身につける小物類にも気を使って全身武装している。

お姉ちゃんの職業はファッション雑誌の編集さんで、オシャレな女の人と、オシャレな男の人に囲まれて、でも身内の欲目を差し引いてもお姉ちゃんが一番オシャレで一番美人だった。部下の人からも慕われているようで、尊敬されてもいるみたい。何度か職場に連れて行ってもらったけど、働いているお姉ちゃんはドラマの主人公みたいだった。

ね、お姉ちゃんって、変でしょう？

それだけの努力をして、仕事があって、認められて、完璧なのに腐女子やっているのだ。とどまるところを知らない妄想、腐と夢をライフスタイルの一部とし食事や睡眠と同じだとはばかりながらも豪語するあの勢いはどこから来るんだろう。

なんで？って、思っちゃうよね。何で、普通に、格好いいOLで終わらないんだろう、って。

お姉ちゃんのおひとり暮らしのアパートには他人に見せてはいけない、主に紙類が山のようにある。押し入れに収まりきれないそれを、友達が遊びに来たときなんかどうしているのだろうかというも疑問に思うが、きつとうまく隠しているのだろう。そういうところ、ぬかりないのだ、あの人は。

けれど、わたしにはよくわからないが、あーゆー世界には越えてはいけない一線的なものがあって、どの道踏み込んでしまったんなら一緒だろうが、お姉ちゃんはその線の手前で踏みとどまっているようだ。

一度だけ、お姉ちゃんに言った事がある。

「お姉ちゃんって、見た目と中身のギャップありすぎだよな。それ、ナニ狙ってんの？」

たまの連休で帰省すると、お姉ちゃんはスウェットに前髪ポンパ崩れのだらしない格好でBLマンガに囲まれてゴロゴロする。流石に居間で男の人同士があられもない姿で絡み合う強烈な絵の数々を広げるわけにはいかないお父さんに卒倒される、というまともなことを言いながら、やっている事はお父さんが卒倒しそうな自堕落生活。

そんなお姉ちゃんは無作為に選んだマンガをぱらぱらとめくりながら、答えてくれた。

「これはー、平穩に生きるための知恵ですよ、なえちゃん」

「平穩？」

お姉ちゃんが見ているマンガの挿絵から目を逸らしながら聞き返す。ちなみに『なえちゃん』はお姉ちゃんがわたしを呼ぶ時の愛称で、本名は『さなえ』だ。

ちよっと視線を巡らせばそこにBL的なアレこれがあるお姉

ちゃんの部屋は一般人のわたしからすればデンジャラスすぎるゾーンだが、この部屋にはこたつもあるしクーラーもあるしテレビだつてあるので入り浸ってしまうのだ。

「そ。あたしは高校卒業間近に悟ったのです。世の中っていうのは、本当の性癖と趣味は隠して生きていくのが自分にも周りにも良いってことを・・・もうちょっと言えば、別にさ、わざわざ言う事でもなくない？」あたしBL大好きなんだ。好きなCPは色々ありすぎて語りきれないけどちよつと前はオヤジ受けでもつと前はヘタレ攻め今はそうだなぁリーマン物ならたいいてい好物。君は誘い受けタイプだね』とか。失敗しちゃった自己紹介の最たるものだよな」

「ああ、そりゃ大失敗だ」

別にそこまで突っ込んだ事を言わなくていいんじゃないだろうかと思ったが、わたしに腐女子的自己紹介のノウハウなんてわかるはずもなく、きつと相手のタイプ？まで指摘するのが彼女たちの流儀なのだろうと余計な言葉はいわないでおいた。

「ねー。そんでね、言うもんでもないなーと思ってたのが、言わなくなつていったら今度は言えなくなっちゃって、なんか隠れたあたしになってしまった、というわけよ。今では勇気があるわーこのカミングアウトには。ま、そうしなくていいように見た目完璧に取り繕ってんだけど。突き詰めたらオシャレ女子キャラもコスプレみたいで楽しいんだよねー」



言って、うへつと奇妙な笑い声を上げたお姉ちゃんは今もうイロイロ駄目だよっぱり変な人だと思ったのが高校一年生の冬。

そんな変なお姉ちゃんが恋しいと思ってしまった、高校二年生の夏。

「お、お姉ちゃん……」

石造りの壁に囲まれた薄暗い部屋の、冷たい床の上。

「おお……」

「降臨なされた」

「いらされたぞ、」

「女神」

「予言の」

「勇者よ」

黒づくめの変な服を着た集団に囲まれて、この非日常を打ち破る非

常識の象徴としてお姉ちゃんを求めたわたしの思考回路に異常なし。

## 1 - 2 お姉ちゃんの妄想と、わたしの現実

うちのお姉ちゃんには、ちょっと困った癖がある。

それは、不意に、本当に何の脈絡もなく突然に、夢を語りだすことだ。

一口に夢といってもいろいろあるが、お姉ちゃんの口から出るとそれは一つの意味しか持ち得ない。将来の展望などの輝かしいモノではなく、睡眠中の物語でもなく、野望には近いかもしれない理想と書いてユメと読むつまりは妄想。お姉ちゃんの頭の中で構築された脳内ワールドには歯止めがきかない。

腐女子であり夢見乙女であるお姉ちゃんの妄想は多岐にわたる。日常の些細な出来事を漏らさず拾って拡大解釈にお姉ちゃんの希望とか要望を付け加えて、つまりは全く事実とは正反対の所で展開されるものだから突拍子もなくしかし収集はつく。

一番多いのは当然と言えば当然、お姉ちゃんの基本BL話で、その中の一つはわたしがまだ中学生に入りたての頃・・・新入社員だったお姉ちゃんの口から出たクール系先輩編集とワンコ属性同期君の恋物語はそれはそれは壮大なストーリーだった。壮大すぎて何かの呪文か呪いのように、今なおわたしの脳から消し去れない、鮮明に覚えているお姉ちゃんの妄想は、こうだ。

仕事が出来て鋭利な印象の先輩編集<二十代後半>と、元気だけが取り柄のスポーツマンタイプの同期君は<双方、実在の人物らし

いゝは教育係と新入社員。

先輩編集は人づきあいが苦手な人で、誰に対してもそっけなく、冷たいけれど、同期君はそんな先輩編集を慕っている。

どんなに冷たくあしらっても明るく自分の周りについて回る同期君に、先輩はだんだん惹かれていつて・・・けれど、性格上、そんな気持ちは表に出せない。悩む先輩編集、彼の気も知らず先輩編集を慕い続ける同期君。

やがて、先輩編集に限界がきて、彼は別部署に異動を希望する。

そのことを前日くポイントに知らされた同期君は、先輩社員を問い詰めるが、勿論本当の事を言えるはずもなく、先輩編集は縋りつく同期君の手を振り払い、これまでで一番ひどい言葉を投げつけて、同期君の前から立ち去る。因みに、この時は雨が降っていなければいけないらしい。加えて、二人とも傘もささずにびしょ濡れにならなくてはいけないそうさ。

そうして見事、同期君の傍から逃げる事が出来た先輩編集は、同期君の事を忘れようと仕事に没頭する。残業は当たり前、休日出勤もいとわず、持ち帰り仕事だつてこなして、先輩編集は誰の目にも明らかなほど、疲労を溜めていった。

一方、同期君は理由もわからず自分の前から姿を消した先輩社員の事を想って仕事に手につかない日々が続いていた。

新しい指導社員はヒステリーなお局様で、普段の彼ならそんな上司でもいつもの明るさを武器に上手くやっていけるはずなのに、らしくもなく小さなミスを連発し、叱られ、落ちこむ。いつの間にか同期君の顔から笑顔は消え、溜息ばかりが耳につくようになる。さて、ここで。

ここでなぜか登場するのがお姉ちゃん。満を持しすぎていて怖い。お姉ちゃんは同期の気軽さもあって、同期君に声をかける。場所は勿論、給湯室。悩み事でもあるの？なんて、親切ごかして。

最初は否定する同期君だけど、お姉ちゃんの尋問から逃れられるはずもなく、最後にはポツリポツリと語り始める。

最近気になる人がいる事、その人が自分の側から離れてしまった事、その人の事を考えると胸が苦しくなる事。

同期君の話を、お姉ちゃんは熱心に聞いた。それが畏だと悟らせもしないのがお姉ちゃんの狡猾なところだ。真剣に聞いているふりをして、お姉ちゃんは腹の中で小躍りを、いや、小さいお姉ちゃんが凱旋パレードぐらいはしていただろう。

本気で悩んでいる同期君が可哀想だと思ったけれど、その可哀想な同期君だってお姉ちゃんの妄想なのであってわたしもまたお姉ちゃんの話術に嵌ってしまったのかとプチ愕然としたりもした。

同期君の話を聞き終えたお姉ちゃんは、彼に一つのアドバイスをする。『私がこんなこと言える立場じゃないと思うけど』そんな風に、常識人っぽい前置きをして。

『一度、その人と話してみたら？』のセリフが前々から準備された最後のボタンだと気づかせないさりげなさでもって、お姉ちゃんのシナリオは整った。

同期君は早速その夜、先輩編集の下を訪れる。家を知っているのはデフォルトだそうだ。

なかなか帰って来ない先輩社員を玄関に座り込んで待つのがお姉ちゃんの基本。体育座りで、膝の間に顔をうずめて、階段を上る音が鞆の落ちる音で顔を上げるが鉄板 『鉄板』の意味を知ったのはこの日が初めてだった。この場合、根強い人気のある流れ、という解釈らしい。焼き肉とかをやる鉄製の調理器具ではないことに日本語の難しさを知った。

『先輩……』

帰って来た先輩編集に、呼びかける同期君の声は甘く、切ない。対して先輩編集は、自宅の扉の前、突き放したはずの後輩を見て、忘れようとしていた感情がじわじわと己の心を侵食していくのに耐えられず、表情を硬くする。

『何しに来た』

あの日と同じ、突き放す言葉でそれ以上を許さず、同期君を押しつけて部屋に入ろうとする先輩。

『俺……俺、やっぱり、納得できなくて。先輩が異動した理由が、知りたくて』

あの日と同じ、詰め寄る同期君は久しぶりにまともに見る先輩編集の姿に、気分が高揚するのを感じていた。

『お前と話すことなんて、ない』

言い放ち、無情にも扉は閉ざされ　そうなるまえに、先輩編集の腕を掴み、強引に室内に侵入した同期君。犯罪者がここに居ます。わたしはそう突っ込んだ。

愛の前ではこの程度のストーリーカー行為、二人の絆を深めるエピソードの一つでしかないと犯罪行為を肯定したお姉ちゃんは、自身のストーリーカーの足の骨を折った事がある。うっとおしい、気持ち悪いとはき捨てたお姉ちゃんは酷く冷めた目をしていたから、きつとストーリーカー行為には双方の同意が必要なんだろうとわたしは結論付けた。

さて、気になるのは先輩編集宅の玄関先で見つめ合う事になった大の男二人。いや、気にはならないのだが話的にオチをつけなくてはならない。語り始めた者としての、責任だ。

二人は玄関先、互いに一言も発さず見つめ合った。先輩社員は自分の気も知らず自宅まで来た同期君に腹を立て、睨みつけるように見ていた。

同期君はそんな先輩社員の顔色が悪いことを察する。動物の勘だ。

掴む腕の細さも相まって、同期君の中で、それまで気づかなかった感情が一気に花開く。

そう、同期君は先輩社員の事が好きだったのだ　　なんてご都合展開。お姉ちゃん曰く、コレが王道らしいのでわたしは口を挟まず、妄想はクライマックスに突入する。

自分の気持ちを実感した同期君は、衝動的に、先輩社員にキスをする。強引で濃厚なくらいが良いらしい。中学生の妹に何て話を聞かせるんだと思わない事もなかったが、それでも黙って聞いていたわたし。

『やめろ！………なんで、こんなこと………  
………何のつもりだ！！』

混乱する先輩編集に、ここで同期君の言つべき言葉は一つ。だそ  
うだ。

『好きなんです』

堂々と。これは暴行罪の一種じゃなかるつかと邪推する賢い妹に、  
お姉ちゃんは花丸をくれた。

『俺は、あなたが、好きです』

同期君の告白にただ呆然とするだけの先輩編集を、ドサクサに紛れて抱きしめる同期君。このポイントはまず“そつと”抱きしめる事、らしい。先輩編集の両腕は中を彷徨っていなければならず、同期君は抱きしめた先輩編集の体温に改めて自分はこの人が好きなんだと自覚し、抱きしめる腕に折れよとばかりの力を込めるべし。

もう何が何だか、そんなこんなで想いの通じた二人はめでたくハッピーエンド。周囲には、部署は違えど仲のいい先輩後輩と認識さ

れ、それ幸いと同期君と先輩編集はお互いのアパートを行き来することでお愛を深めあう。途中で図々しく登場したお姉ちゃんに同期君がお礼を言うシーンなんかも交えて、お姉ちゃんの脳内妄想劇場は  
終幕。

この妄想には続きがあるのだが、それはまたいつかの機会に。実は正直、そんな場合じゃない。そんな場合じゃないと言えば、そもそもお姉ちゃんの妄想を語っている場合でもない。

じゃあどんな場合かというところ。

「さ、勇者殿。こちらへ。お部屋をご準備しておりますし、お望みならば湯あみと、着替えの用意もございます」

混乱する場面だ。数多ある妄想の中でお姉ちゃんも言っていた。トリップというのはいきなり来るものだから、大抵の場合は現状把握から始めなくてはいけなくて初心者には混乱するのだ、と。上級者なんているんですかと思わずツッコミンでしまったわたしはまだまだ忍耐が足りない。

けれどお姉ちゃんはそんなわたしのツッコミをモノともせず、胸を張った。

日々妄想で鍛えている自分こそ異世界トリップ上級者。可愛い妹に、その極意を一つ、伝授してしんぜよう、と。



いらぬ。

心底思ったがお姉ちゃんは勝手に語りだし、辟易しながら聞く話に聞いていたあの日。

今は思う。聞いていてよかった。教えてくれてありがとう、お姉ちゃんの極意、今生かします。

「いや、いらぬんで家に帰して下さい。あと、わたしはあなたの言う勇者とやらではありません」

黒フードの下から現れた柔和な顔立ちの青年の手を、無造作に払いのける今のわたしは、あの日の先輩編集より冷たかったと思う。

『ノーと言える日本人であれ』

それがお姉ちゃんに伝授された極意。

「何をおっしゃいます。あなたは我らの呼びかけに答えられた、まごう事なき勇者殿です。あなたには我が国に滞在していただき、彼の魔王から我らと我らが民をお救いいただきなくてはなりません」

「他の方をあたって下さい。わたしは日本に実家があるので帰ります」

突然の異世界トリップで、混乱して、大抵の場合はそのまま流されてしまう。

流されて、縁もゆかりも恩もない、どちらかという怨恨んでも良いような相手の為に命を張らなきゃいけない、なんて状況に陥るのはわりとよくあるパターン。まずはそれを回避すべし。

相手の言葉に、容易に頷いてはいけない。

曖昧な態度をとってもいけない。

敵は異世界人、こちらの常識が通じる相手と思つな。

異世界トリップに憧れている割には大概な言いようだが、この時のお姉ちゃんは多分、わりと最近に、トリップして酷い目に合う類のネット小説でも読んだのだろう。だって他の日は別の事を言っていた。美形が出たらとりあえず流されとけ、とか。イケメンの弟が欲しいから頑張つて、とか。

「そのようなこと……」

わたしは『ノーと言える日本人であれ』というお姉ちゃんの極意を採用した。黒づくめのフードの下は多分、お姉ちゃんのいう“美形”と称して間違いはないだろうけど、それ以上に得体の知れないカンジがするからだ。

というかそもそもこんな薄暗い部屋で、しかも石畳、わたしを囲んで黒づくめのフードかぶった集団が円を作っている絵面を想像してみたい。どう考えたって、悪魔召喚か生贄の儀式だ。

「もう一度言います。わたしは勇者とやらではありません。家に帰して下さい！」

わたしは両手にぐっと力を込めて、強い声をあげた  
紛らわす為に  
恐怖を、

怖い。

怖い。

怖かった。

突然の現象、見知らぬ場所、知らない人に異様な空間。“勇者様”が自分を指す言葉である事に気付きたくはなかった。

混乱だっと思っている。意味がわからない、なんだこれなんだここ。そう思っているけど、そう思えば思うほど、わたしの心と脳髓に強く訴えかけてくるのがお姉ちゃんという人。

わたしの心はもう意識放棄寸前で、それでも口をついて出る冷静な言葉はお姉ちゃんとの会話という経験の賜物。ツツコミ放棄がデフォルトになってしまった事、今この時は全力でお姉ちゃんに感謝したい。少なくとも、虚勢は張れる。こういうのは最初が肝心、と教えてくれたのもお姉ちゃんだった。

そして、これがわたしの精いっぱいだった。

「あまり、わがままを仰らないで下さい。貴方様には最早帰る場所はなく、その手段もございません。我が国を闇より救って下さる以外に、勇者として生きる以外に、貴方様を選びうる道はないのです」

限界を超えたわたしの虚勢は、言葉は、柔和な声に打ち砕かれた。

「……………お姉ちゃん。怖い人がいる。何だかすごいへ  
理屈こねて、わたしの逃げ道をふさぐ非人道的な言葉をさも正しい  
ことみたいに吐き出す誘拐犯がいる。」

怖いよ、お姉ちゃん。

こんな怖い思いをするぐらいなら、お姉ちゃんの妄想を延々と聞いて  
いた方が全然マシ。

だってこのヒト、こんな頭のおかしい事言いながら、笑ってる。

「さ、勇者殿」

再び、手が差し出される。

わたしはその手をじっと見つめて、目の前の笑顔仮面を睨みつけ  
て、その手を取った。重ねたわたしの手が震えていた事、笑顔  
仮面には伝わっただろうけど。

怖くて。

これ以上、何かこの人の気に障るような事を言ったら、何をされ  
るかかわからない。そんな雰囲気は室内には充滿していたから。

「聞き分けていただき、望外の喜びです」

そう言っつて、笑みを深くした笑顔仮面。ぎゅっと握られた手を引  
かれ、扉と思しき明るい方向へ引き寄せられる。

そんなわたしと笑顔仮面の左右を、守るように、逃がさないで  
もいっつように囲むその他の黒フード集団。顔が見えないのが、笑顔

仮面とは違った意味で不気味だった。

ああ、お姉ちゃん。

これがお姉ちゃんの妄想の続きで、この笑顔仮面が隣の黒マントさんとデキてる設定だったら、わたしは貴方の妄想にこれまでで一番大きな拍手を贈ろうと思えるのに。

### 1 - 3 お姉ちゃんのゆめと、わたしの悪夢

うちのお姉ちゃんは、非常に遅い。

肉体的にという意味が何故か含まれ、精神的なそれに近い、妄想的な意味で。

遅しすぎる妄想力。

想像力、と表記できないのが悲しい所である。因みにお姉ちゃんは、理想のボディラインを作るためと、週3でボクササイズに通っている。

その妄想力の一端を前回ちらつとお話したわけだが、あれはわたしが覚えている中でも一番古い記憶で、お姉ちゃんの妄想力の遅さを裏付ける妄想話は他にも沢山ある。

お姉ちゃんの戯言で一番多いのは言わずと知れたB Lモノだが、ここ最近その鉄板を押しつけて台等してきたのが“ドリーム”。妄想の原点（お姉ちゃん曰く）。

お姉ちゃんは、空を自由に飛びたいらしい。

・・・というのは例えて、どちらかというと世界旅行に行きたいらしい。それもただの世界旅行ではない。

『異』世界旅行。それが、お姉ちゃんの欲しいどこ もドア。

マンガの中や小説の中、ゲームの中にあの子の妄想の中まで、お姉ちゃんの行きたい場所は海外旅行に夢を馳せる普通のOLさんより多岐にわたる。

けれど、わたしにその妄想を語る時、お姉ちゃんの瞳は悲しく揺らぐ。

理由は、お姉ちゃんが年齢制限に引っかかってしまっているためだそう。法的な規制か何かだろうか？

『異』世界旅行 巷では異世界トリップ、というそうだが実現させるためには幾つかの条件がある。お姉ちゃん談。実現させるつもりなのかとツツコミたかったがそこはツツコミ放棄がスナンスになって来た頃だったのでぐっところえた。

まず、十代である事。

この妄想を披露した当時、お姉ちゃんは既に二十代も半ば過ぎ。肝心の十代、お姉ちゃんの妄想は100%BLだったそうで、あの黄金期にもっとしっかり妄想しておけばよかったとやや本気で嘆くお姉ちゃんはどこに行きたいのか全く分からなかったわたしは将来公務員にでもなるうと思つた。

十代であり、かつ女性なら『女子高生』もしくは『女子中学生』はたまた百歩譲って『女子大生』であること。つまりは、学生だ。何だそれ。

そして、黒髪黒眼の日本人である事。

これが案外重要なキーポイントになるらしい。余談だが、お姉ちゃんのこの妄想のおかげでわたしは高校に入学した時チョコレート色に染めた髪を翌日には真っ黒に染め直させられた。烈火のごとく嘆くお姉ちゃんは生活指導の先生より熱心だった。

備考として、容姿や性格は問わず、趣味特技および特殊能力は要相談。特殊能力って何ですか。

総合するとアジア系の十代の若者は大半が異世界トリップとやらをする可能性があるように思える。

そのわずかなチャンスをつかめ！と全部本気で鼻息を荒くしたお姉ちゃんの頭が大丈夫な事を知っているから、お姉ちゃんって変だなーと結論付けて、わたしは将来とか大人になる事に夢を持つ事を諦めないようにした。未来ある若者だから、わたし。

さて、お姉ちゃんの与太話を参考にすると、わたしは今、異世界トリップをしてしまっているのだ。なんてこと。

本当に掴んでしまったこれはきつとチャンスじゃなくてピンチだよ、お姉ちゃん。

「勇者様。お召しものを失礼いたします」

薄暗い部屋から笑顔仮面に連行されてついた先、高級ホテルのスイートも真っ青な高級ルームに待ち構えていたのは何とメイドさん。お帰りなさいませご主人様。一時期お姉ちゃんの中で流行語大賞だった言葉だ、懐かしい。

そのメイドさんの中でも偉そうな人にとりあえず風呂に入れと慥無礼に威圧され、内心びくびく外見憚然としながら風呂場に足を踏み入れたのが畏だった。シュチュエ ションのおびき寄せる畏にはお姉ちゃん耐性があるはずのわたしが、まんまとひっかかるほど緻密に仕組まれた落とし穴。

逃げ場のない狭い脱衣所で、わたしは一人、なのに敵はなんと五人もいる。



「自分で出来ます」

「いいえ、勇者様はこの国の希望。今や王にも勝る貴きお方と伺っております。そんな勇者様のお手をわずらわすことなど、出来ようはずがございません」

「自分でやります。いいですから、あっちに行ってください」

敵の強情さに、思ったよりもずいぶん冷たい言葉が切りつけるようにわたしの口から吐き出された。言ってしまったから言い過ぎたと後悔したけど、それでもやっぱり冗談じゃないと思うのは他人に脱がされて、おそらく体を隅々まで洗われてしまいそんな気配がする事。

お姉ちゃんは言っていた。

異世界トリップには幾つかのルートがあって、その中の一つ、一番ポピュラーで人気のある『世界の救世主的な何か』になっってしまった場合、お風呂イベントへのフラグはたつたも同然、回避する術は強固な意志のみ、と。

これもまた、お姉ちゃんの極意『ノーと言える日本人であれ』に通じる。先ほどは頑張りきれなかったが、今度の相手は同じ女の人で、メイドさん。それに、お風呂に入らないと言っているわけではない。

勝てる。

わたしは確信した。

ありがとうお姉ちゃん。あなたの妄想はこんなところでなんだか役に立ってます。

あなたの妹はこのこともわからない世界で初対面の怪しいフリード青年たちに連れられて理不尽な目にあわされようとしているけど、

微妙に心構えみたいなのが出来ているのはお姉ちゃんのおかげです。  
わたしはこれからこの怪奇現象&理不尽に立ち向かうべく、がんばり  
・  
・  
・

「わかりました。それが勇者様のご意志とあらば、いたしかたありません。わたくしども、王につかえる僕の一として、そのご下命を全うできなかつた責を負い、この場で果てる覚悟・・・」

「脱がせて下さいお願いします」

・・・・・・・・・・・・・・・・

お姉ちゃん。

今までお姉ちゃんのためごことを聞き流したり、ツツこんだりツツコミ放棄したりしてごめんなさい。もっと熱心にお姉ちゃんの話聞いて、自分の命を盾に脅迫された時の対処法を聞いておけばよかつたよ、今は後悔しきりです。ばんざいをして服を抜かれるとか、羞恥プレイって言うんですよね。これもお姉ちゃんに聞いて覚えた単語です。

どんな言葉でも覚えておくものです。いついかなる時に有用と

なるかわからないんだから、世の中って理不尽です。

わたしは遠く、湯けむりの向こうを見つめた。その先にはお姉ちゃんがいっぱい笑顔でサムズアップしてそうで、なんだか泣きそうになったけど。

うちのお姉ちゃんは、いつでも“うちのお姉ちゃん”だ。

腐女子なのもお姉ちゃん、夢を見るのもお姉ちゃんだけど、働くお姉ちゃんもお姉ちゃん。

この三者に共通するのは、どのお姉ちゃんを見てもわたしは“みつともない”とか“情けない”とか思った事はないこと。全然違うのに何故か、『ああ、お姉ちゃんだなあ』と思ってしまう。困った人だなとも常々思っている。

働くお姉ちゃんは格好いい、とは前にも話したが、お姉ちゃんは本当に仕事が出来る人らしく、二十代後半女の身で既に有名雑誌の編集長を務めており、雑誌の発行部数を倍に伸ばしてその世代のトップに押し上げた凄腕だと教えてくれたのはかつてお姉ちゃんの妄想の餌食になっていた同期君。

彼がお姉ちゃんを語る姿はどこか誇らしげで、お姉ちゃんを見つめる瞳に友達のゆきちゃんがサッカー部の啓太君を見るものと似た色を見つけて、わたしは同期君が、あるうことかお姉ちゃんを好きなんだと瞬時に察し、心の中で土下座した。あんなお姉ちゃんでごめんなさい。皆を騙してすいません。世間を欺く犯罪者の身内は肩身が狭い。

そんな風にお姉ちゃんの事を褒めまくる大人たちの口から出る褒め言葉というのは大抵決まっていて、まずその手腕が挙げられるのは社会人だからか。

仕事が早く、的確で、行動力があって顔も広いらしく、誰もが無理

だと笑い飛ばした企画をこれまでにくつつも成功させてきた凄腕。

動作は緩慢、行動範囲は両手の伸ばせる程度、一度座つたらトイレも行きたくないというどこかのものぐさお姉ちゃんとは正反對すぎて多分違う人の事だろうと思つて聞き流していたらどうやらお姉ちゃんの事で間違ひなかつたその評価に驚く事も出来なかつたわたしの反応が『そうですか』で終わつてクールな子認定されてしまつたのはどう考えてもお姉ちゃんが悪い。

無駄にテンションの高いお姉ちゃんが、お母さんのおなかの中でわたしに配分されるはずだつたテンションまで持つて出てしまつた説は我が家でも通説だ。

そんなテンション二人分のお姉ちゃんのお仕事武勇伝は数知れず、中でもとあるブランドとのタイアップ、雑誌の付録にそのトートバックとオリジナルポーチをつけるという無茶というより無謀な案をわずか半月で実現させたというお姉ちゃんのお説の始まりを語つてくれたのは、お姉ちゃんの部下だという可愛い系のお姉さんだつた。

件のブランドは、その名を『MY』。わたしでも知つている高級ブランドだ。

世界的にも知名度が高く、決して自身の安売りをしない事でも有名で、セールもしなければアウトレットにも出さない、雑誌やテレビとのタイアップ企画なんて低俗な事はしない、が売りのセレクト御用達ブランド。

どんなに金を積まれても気に入らない仕事はしないし、他と手を組むくらいならブランドを潰す、が経営者兼デザイナーのポリシーだとかで、有名メーカーも老舗の百貨店もことごとく誘いを断られていたとか。

それを口説き落としたのが、何故かお姉ちゃん。世界初の快拳だと興奮したように語るお姉さんにわたしはどう反応していいかわからなかつた。

まだ中学生のわたしには大人の仕事の事なんてまだよくわからな

いし、お姉ちゃんがすごいって、そんなのとつくに知っている。お姉さんが言うのとは別の意味で、だが。

それに、身内を褒められるのってなんか気恥かしい。そんなことないですよ。って謙遜したくなるのは挨拶みたいなもんだと思う。実際したけど。

『お姉さんが言うようなすごい人じゃないですよ、お姉ちゃんって』

謙遜、とは言ったが、わたしの本心だ。お姉さんが言うような、がポイント。我ながらうまく言い回しと納得していたわたしの耳にはしかし、間髪いれず否定の言葉が届いた。

『ううん、すごいだよ。見て、このページ。MYのデザイナーで、オーナーの高城さんの独占インタビューなの』

お姉さんはわざわざそのブランドのデザイナーだという男性の特集ページがのっている雑誌を探してきて、わたしに見せてくれた。

『そもそも高城氏はメディアに露出する事を極端に嫌う人で、これまでテレビ出演も雑誌のインタビューも一切断っていたの。一度週刊誌に載った事があるんだけど、それが高城氏の了解を得てないすっぱ抜きだったみたいで・・・白黒の小さい写真でね、高城氏よりも隣に映ってた人の方がはつきりわかるくらいだったのに、高城氏は怒り狂って出版社を潰してしまっただけですって。どんな手を使ったのかまではわからないけど、出版業界では有名な話よ。MYだけは怒らせるなっていう、恐怖の格言付きでね』

成る程、開かれた誌面には男の人が、にこりもしない、所謂仏頂面でこちらを見ていた。ひと目で気難しそうとわかる雰囲気があ

って、けれどそれは嫌な感じではなく、気高さ、とでも言うのだからか。孤高とか。そうした、誌面越しにもわかる『一線』を持つ人だった。

そして、こんな人と仕事してるなんてお姉ちゃん妄想が止まらないだろうな　と思うようなイケメンでも……あれ？

『その、高城氏のインタビューよ？ファッション業界に出版界、政界・財界にも激震が走ったわ、この号が発売された時は。他の出版社からはどうやってこの対談を実現させたのかって問い合わせが殺到するし、高城氏とのパイプ役があるならぜひ紹介して欲しいって言って来る人が後を絶たないしで、会社がプパニックにもなった。かなりの見返りを突き付けて、高城氏を紹介してくれて言う話もあって、それに重役連がノリ気になちやっあってね？いくつかの申し出は受ける方向で調整してたわけ。なのに当の本人の編集長つたら、涼しい顔で、全部断って。勿論お偉いさん達は大激怒。会社の利益に貢献しないなんて、それでも社会人かってフロア中に響き渡る怒声が聞こえてね、私達、びくびくしながら聞き耳を立ててたの。そうしたら編集長、何て言ったと思う？

じゃあ、

会社を辞めます、って。高城氏には高城氏の主義主張があり、わたしはそのほんの少しの隙間に滑り込ませてもらったに過ぎないから、彼に関してどうこうする権利はありませんし、わたしの力の及ばないところを会社側から要求されるのは不当だと考えます。そのような理不尽をまかりとおす場所には、在籍する必要性を感じません

今度はフロア中がしーんとしちゃってね、でも絶対皆、おんなじこと考えてたと思うのよ。編集長、格好いい……!!って

お姉ちゃんの武勇伝の続きを語ってくれているらしいお姉さんの声は、わたしの耳を素通りしていた。それどころではない驚愕が、わたしの脳をぐわんぐわん揺らしていたからだ。

だってわたし、この人見た事ある。

というか、現在進行形でこの顔の満面笑顔がわたしの携帯のデータフォルダに納まっていたりする事実は墓まで持って行くとして・・・  
・何だろう、冷や汗が。夏なのに。

あれはわたしが中学二年生の冬だったと思うが、お姉ちゃんはそころスポーツ漫画に嵌っていて、野球にテニスにバスケット、サッカーラグビーアメフト卓球さらには空手柔道剣道ボクシングに聞いた事のない格闘技にまで精通していた。

スポーツを通して生まれる恋は素晴らしい、と熱弁していたのを覚えている。恋が生まれるのが選手とマネージャーの間ではないのは、例えマネージャーでもそれが女性でない事も、今更明記するまでもないだろうが。

お姉ちゃんのスポーツ熱は間違った方向にとどまるところを知らず、アパートの部屋に入りきらなかったと思しきスポーツ漫画が我が家の書斎を占拠し始めた頃（お姉ちゃんの部屋は既にアヤシイ紙類で入りきらなくなっていた）、お姉ちゃんが話してくれたのは最近お気に入りの漫画に出てくる脇役君（野球・ポジションキャッチャー、備考：メガネ）にそっくりの友達が出来たという話。その脇役君が掛け算の右側になるカップリングが一番多いのよと見事な蛇足をつけてくれたお姉ちゃんはイキイキしていた。

哀れ、その脇役君そっくりさんもお姉ちゃんの本性を知らず忍びよられて妄想の餌食となっているのだろう・・・というか実際お姉ちゃんの妄想メールが毎日届く。心の底からごめんなさい。

そして脇役君への何度目かわからない脳内土下座を敢行した数カ月後、お姉ちゃんから来た新着メールに、わたしは土下座以上の謝罪法を本気で模索した。



脇役君はリアだった。

そんな内容。リア「現実という意味だとわかってしまう自分が悲しかった。けど、これだけだったら、ああお姉ちゃんついに念願がなったんだよかったねと適当に返信をして脇役君への土下座をなかつたことにしてもよかったのだが、過程を知っているわたしにそんな逃げ道は用意されていなかった。

件の脇役君

“君”とはいっても確実にわたしより年上だけ

ど　とお姉ちゃんの出会いは本屋さん。お姉ちゃんが雑誌の売り上げ状況のチェックと、新刊の購入の為に立ち寄った大型書店で見かけた脇役君に、すかさず声をかけた彼にとっての悲劇の幕開け。

これを行動力があると言って良いものか、ただの迷惑なナンパじゃないかと思うのだがお姉ちゃんほどの美人がやると相手は嫌な顔をしないのだから世の中間違っている。

声をかけて、脇役君が手にしている本から彼の好みそんな話題を瞬時に見抜き会話をする事に成功したというお姉ちゃんは悪魔だと思ふ。初対面の人間の好みを本一冊で察する洞察力の鋭さも、それに対応できる知識の深さも、更には相手に警戒されずに話を広げてあつという間に親しくなってしまうその手腕までも、人の業とは思えない。これで、声をかけた理由が好きな漫画の好きなキャラに似ていたから、なんて下らなさMAXなものなわけだから、お姉ちゃんには才能を間違った事にしか使えない人らしいとしみじみ思った。だから世界はまだ平和なのかな、なんて。

お姉ちゃんはその逞しすぎる妄想力と知らない方向に無駄に発達した野生の勘で、ひと目見た時から脇役君がそうなんじゃないかなーとうすうす思っていたそうだ。

で、ちゃっかりと友達の座に収まりちよつとつついてみたら、出てきたのは幼馴染への友情とも愛情ともつかぬ淡い想い。脇役君の様子・話し方から相手が男性だと察した時のお姉ちゃんのガッツポーズ

ズが見える。

確信までは至らなかったが、それでもこの日からお姉ちゃんの人  
生はバラ色に彩られ、グレーを黒に変えるべく計画・奔走した彼女  
の活動日記はわたしのメールボックスに残っている。

まごう事なき犯行計画だと思う。そんな予告は一介の女子中学生  
である妹にしているものではないとも思う。頼むから警察に届けて  
欲しいと、切に願う。

これのせいで、わたしは脇役君が本当にゲイ『だった』のか、お姉  
ちゃんのせいでゲイに『なった』のか数日悩んだ。

土下座以上つて・・・切腹？とかチラツと考えた。この場合腹を  
切るのはお姉ちゃんだと結論付けて、そもそも中学生のわたしに何  
ができるのか考えて何もできないじゃんと感じて、そうしたらも  
うなんだからいいか！って気分になった思春期の思考回路。ドンマ  
イ、脇役君。最後に彼に送った言葉は軽かった。

わたしがもんもんとしている間もお姉ちゃんの報告は続いていて、  
衝撃から立ち直ったわたしは悩んでいる間は一つも見なかったメー  
ルたちを開いた。メールにはまた、わたしには一つも関係ないし得  
にもならぬような無駄な情報がぎっしり詰め込まれていて、開き直  
ったわたしがそれにまとめて『よかったね』と適当な返事をしたの  
は直近のメール内容が返信を求めている感じでうざかったからと言  
わない。なんて良い妹だろうと自分で自分に感動した。

お姉ちゃん無駄情報によると、何でも件の幼馴染さんは美形で、  
有名人。彼の周りにはいつもきらびやかな人種が集まって、地味な  
自分は気後れすると悲しそうに話す脇役君にお姉ちゃんは心の中で  
悶えたといういらぬ感想を付けてくれた。

この頃になると、わたしは脇役君と幼馴染さんについていつもお姉  
ちゃんの妄想じゃないかと思い始めた。だって、あんまり話が出来  
過ぎていて。お姉ちゃん好みの方向に。そう考えるとじっくりくる  
なと思ったわたしは、この話を完全にお姉ちゃんの妄想カテゴリー  
に入れることにした。

お姉ちゃんは実際に幼馴染さんの偵察にも行った様で、わたしはこれもまた、妄想ならまあ、犯罪ではないと結論付けて心の平穩を保った。その後、脇役君の恋を全力でバックアップする！と、完全犯罪の決意が電波にのってわたしの携帯を震わせた時も、がんばれば？みたいな気持ちだった。

お姉ちゃんによると、脇役君とは毎日のメールにたまの電話、週2で食事に、週末は遊びに誘うとこまめに逢瀬を重ね、お姉ちゃんと脇役君の距離は確実に縮まり、ある日脇役君の口から最近彼女が出来たと思われてる、なんて面白そうに語られるまでとなったそうだ。

ここでのポイントは、これだけ親しくしておきながら脇役君がお姉ちゃんに微塵の恋愛感情も抱いていないところだ。美人で、完璧の猫を被った自分という異性に特別な感情を抱かない脇役君に、間違いないと確信したお姉ちゃんは男と女の友情はアリだとにんまりしたという。

そして脇役君と仲良くなる事こそがお姉ちゃんの計略だったと聞いても、最早わたしは驚かなかった。だろうなーと、それまでに数多お姉ちゃんの妄想を聞いていたわたしには既に察しがついていたのだ。これを毒された、という。

そして結末。

事態がお姉ちゃんの計画通りに進んでも、わたしの反応は『へー』で終わる。そもそもこれお姉ちゃんの妄想だしね、って。

脇役君と幼馴染さんはめでたくゴールインした。へー。

事の経緯を簡単に説明すると、幼馴染さんは最近付き合いの悪い脇役君をおかしいと思い探ってみる。と、自分の知らない女と仲睦まじげにしている所を目撃し、幼馴染さんは激昂し、お姉ちゃんの目の前で脇役君を問い詰めたという。しかも街中で。どんな昼メロ展開だと思ったが、時間は深夜だったらしい。

怒りに震える幼馴染さんと怯える脇役君を前に、してやったりなお姉ちゃん。誰に軍パイが上がるかなんてわかりきった相関図は筋書き通りに事を運び、お姉ちゃんは二人で話し合いなさいとかっこよく潔くその場を立ち去った。

二日後に脇役君から幼馴染さんと付き合う事になったというメールが来たと嬉しそうにわたしに報告メールを送って来たお姉ちゃんの妄想には付き合ってもらえないとわたしはそのメールをスル　した。

そう、わたしはこのエピソードをよくあるお姉ちゃんの妄想話のひとつだと思っていたのだ。完全に。

その日までは。

『ある日突然編集長が、当時は一編集でしかなかった編集長がよ？彼本人を連れてきて、その場でバツクのデザイン画を描いてもらったの。私、あの日ほどこの会社に入社してよかった！って思った日はなかったわ。だってあの高城氏がよ？目の間で、デザインを・素晴らしかったわ。デザインもだけど、彼本人も。写真でも格好いいけど、実物はもっともっと素敵な人だったの！！』

興奮しきりのお姉さんに、わたしは相槌すら打てなかった。けれどお姉さんはわたしの反応なんて気にもせず、更に語り続ける。

『編集長のおかげでうちの会社はMYとはほぼ独占契約状態で年に二回新しいデザインがもらえるし、こうして対談も実現させて、雑誌の売り上げが伸びたのもこの時からだし、もう編集長様様！って、重役連も彼女には頭が上がらないの。そうそう、彼ね、たまに企画の打ち合わせでウチの会社に来てくれるんだけど、そもそも彼が来てくれる事が異例すぎるの。普通はこっちから出向くのが主義じゃない？なのは何でか彼、編集長が連絡したら絶対来てくれるの。来て言い合いばかりしてて、聞いているこっちはらはらするよ。な怒鳴り合いになる事もあるんだけど、いつも勝つのは編集長なのよ。余ほどの事じゃない限る彼はこちらの要望を聞いてくれるの。どんなに怒っていてもね。だから私達、本当に編集長の事を尊敬してるのよ。あんなに気難しい人と対等に話せるなんて、本当にすごい人だわ。・・・そうそう、内緒だけどね、私、彼は編集長の事が好きなんじゃないかって思っているのよ』

誌面の男性を示しながら、そう誇らしげに、どこか羨ましそうに語る女性編集者さんに、わたしはいつも通り内心の動揺がみじんもうかがえないだろう平坦な口調で「いや、無いでしょうそれは。こんな格好いい人がお姉ちゃんを好きになるなんて」とやっこのことで絞り出した。実際は変な汗が背といわず脇といわず伝っていた。

だつてこの人、雑誌の男性は、お姉ちゃんの話に出てきた「幼馴染さん」なのだ。間違いない。

一時期落ち着いたと思っていたお姉ちゃんの妄想メールが再開した時送られてきたテンション高いメールに添付されていた画像に映っていた人だ。お姉ちゃんと、この人と、もう一人は脇役君の映った鮮明な写メは今もわたしの携帯のデータフォルダに収まっている。

「結城君（脇役君の本名）を通して仕事がうまくいった????ラッキー????」

確か本文はこんな感じだったと思う。うざすぎてよく覚えていないけど。というか写真自体合成だと思っていた。お姉ちゃんってば、また無駄に高い技術身につけて・・・と呆れ半分感心半分思った事は覚えている。

それがまさか脇役君と幼馴染さんが実在の人物で、お姉ちゃんがおまけみたいに語った仕事の恩恵とやらが本当にあつた事だったなんて。

しかもお姉さんが弾んだ口調で語るイケメンデザイナーさんは、確実に、お姉ちゃんの中で「ブランドのデザイナー」より「幼馴染さん」としての価値の方が高いと思われるこの事実を如何せん。最近古文を勉強し始めたよ。

いついかなる時も、体裁はどうあれ内実は自分の欲望の赴くままに生きるお姉ちゃんを、今改めて、色んな意味ですごいと思う。

有名人だとか、イケメンだとか、世間一般の評価に惑わされないで自分独自の基準で他人を計るのは、誰にでもできる事じゃない。まあ、お姉ちゃんの場合その基準自体が独特すぎて違った意味で誰にでもできる事じゃなさそうだけど。

お姉ちゃんなら、会社の社長さんとかの前でも、ハリウッドスターを見て、例え総理大臣と対面する事になってもお姉ちゃんのままでいるだろう。社長×秘書なんてお姉ちゃんの大好物だしハリウッドスターが来日して日本のサラリーマンに恋をするのがお姉ちゃんの夢の一つみたいだし、政治家なんて誰もかれもスケベジジイ、あて馬捨て駒悪役の代表格と素で言つてのけるのがお姉ちゃん。でもイケメン政治家×秘書とか、村の青年とかはアリらしいお姉ちゃん。の懐を広いと称すべきかどうかは永遠の命題だ。

ちよつと前までお姉ちゃんの思考回路はわたしに迷惑ばかりかける、と不満もあつたけど、それはわたしの筋違이었다。お姉ちゃんはお姉ちゃん、ちゃんと自分の責任で他人様に迷惑をかけないように好き勝手やって、恥ずかしかったり申し訳なかったりするのわたしは勝手だったのだ。それが今すぐくわかる。

「面をあげよ」

かけられた、遙か高い場所からの声にわたしはぐつと唇を引き結び、ひとつ深呼吸をして、顔をあげた。

わたしの視線の先、何段かの低い階段があつて、その上にしつらえた豪華な椅子に座るのはこの国の王様。

「そなたが『勇者』か」

お風呂でしこたま磨かれた後、問答無用で着せられた純白のロング・ドレス。やめてという隙もなく髪を結われ化粧を施されて、何がだかわからないままこの広間に引きずって来られた。そして有無を言わず膝をつかされ、囚人のように首を垂れることを強いられ、一つの説明も心の準備も出来ないままの国王様と呼ばれる人との対面。

頭の中はぐちゃぐちゃだ。

今正面に居る人、国王様が、どんな顔をしているのかすらよくわからない。呼吸も、上手く出来ていないような気がする。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

だから、王様の問いに答えられるはずがない。答える前にまず、現状意味不明過ぎて何の質問をされたかわからなかった。

ええと・・・・とりあえず何でわたしはドレスを着てるんですか？

「どうした、答えよ。余が許す」



いや許されても。許されてもね？どうしようもない事って世の中には沢山あると思うのです。

でもそのどうしようもないことが何も無い状態を演出出来ちゃうのが権力者。王様っていう図式が出来上がっているのが専制君主制。絶対王政独裁制どれがどれだかもうよくわからない。

「なんだ、勇者は口がきけぬのか？」

王子よ

「勇者殿の声はこの耳で確かに聞きましたから、おそらく陛下の前で緊張しているのでしょう。どうやら勇者殿は身の程をわきまえた、かわいらしい方のようだ」

「そうか」

そうか、じゃないよ。そうか、じゃ。ないよ。ないない。ないっ  
たらない。

かわいらしいも何だそれ。身分って、わきまえるって、何を？わたしとあんたの間に存在する何かがあるって言う話？何ソレわけわかんない。つーかあんた王子？笑顔仮面おうじ？王子って何？玉子の仲間？

「ならば、首肯でよい。それぐらいなら出来るだろう？」

「流石は陛下。御心が広い　　よろしいですね、勇者殿」

よろしくない。全然よろしくない。何でわたしはこんなところで国王やら王子やらと対面してるんですか？

わたしは混乱していた。こちらにきてから、こちらに来てしまったと気づいてから、ずっと続く混乱だ。

だって、こんな状況おかしいよ。何でわたしが勇者なんて呼ばれて、わたし、違うって言ったよね？家に帰してって言ったよね？

正当な主張のはずなのに、あの笑顔仮面王子に握りつぶされて嫌だって言ったのにお風呂は入らされる、囚人さながらにひっ立てられて王様の尋問まがいの質問タイム。答える義務はありますか？ 黙秘権の行使は法で認められていませんか？

おかしいよ。何もかもがおかしい。おかしいのに、そう思う気持ちはあるし声を上げる意志もあるのに、全部を無視されてわたしの言葉もい持ちも何一つとして誰にも届かない。だんだんと声が、気持ちも、小さくなっていく。

笑顔仮面王子の問いかけを、わたしは肯定も否定もしなかった。そしてそんなわたしの反応は当然のように肯定ととられて。

「うむ。ならば勇者よ。そなたに、我が国の救世主となる榮譽を与えよう。その命、この国の為賭けよ」

お断りします。

言いたかった言葉は声にならず、横に振るはずの首は錆ついたように動かない。何の反応も出来ない。わけのわからない状況が、目の前に居る人が『王様』という偉い人だという認識が、わたしの

体も意志も凍りつかせているみたいに。

「  
だと、勇者殿は申しております」  
そのような栄光を授けられる事、無上の喜び

わたしの言葉ではない嘘を淀みなく口にした笑顔仮面王子。そんなこと言ってもいないし思ってもいない。

けれど王様はそれに満足したようで、また何事かを口にすると、わたしは立つように促され、またしても無理矢理頭を下げさせられて、左右を甲冑を着た兵士さんに掴まれ、引きずられるようにして広間を後にした。

まるで自分の物じゃないみたいな足を、只規則的に右左と出しながら、考えるのはお姉ちゃんの事。誰に対しても自分基準で価値を図り、臆さず媚びず、いつでも自分であったはた迷惑さ。

今気づいた。

お姉ちゃん。

“自分”でいることは、すごく、すごく、大変なことだね。

迷惑なんて考えてごめん。お姉ちゃんはすごい。

いつだってお姉ちゃんだった、お姉ちゃんってすごい。

お姉ちゃん。

お姉ちゃんだったら、どうする？

わたしがお姉ちゃんだったら、どうすればいい？

お姉ちゃんがわたしだったら、どうした？

お姉ちゃんの思考回路って突拍子もないし非常識すぎるので、わたしには想像もつかないから、教えに来てよ。

『……………やべっ、トリップさいごっ』

わたしが初めて『トリップ』という単語を耳にしたのが、中学生になったばかりの頃。お姉ちゃんのこのセリフで、英語を勉強し始めたばかりのわたしは『はじめまして。ご機嫌はいかがですか』とマイクに訪ねることが出来るようになったし、ベスとホームパーティーだって開いた。

そして見知らぬ人に『良い旅を！』とラテン系のテンションで投げかけるのもお手の物となった頃、トリップに『旅行』以外の意味があるという間違った知識を手に入れてしまうこととなったのだ。

『トリップ？お姉ちゃん、またどこか旅行に行くの？』

お姉ちゃんは多趣味だ。その趣味の過半数を人に言えない内容のものがしめているが、公言しても憚りないものもあり、はばかりなく公言出来るかたちに収まるモノもある。

その一つが、旅行。一人で行くのも友達と行くのも、国内も海外もテーマパークでも温泉でもどんどこいらしいが、お姉ちゃんが一番好きな旅スタイルは『歴史と妄想を巡る旅』。城・寺・遺跡は外せない、なぜならそこにはロマン＝妄想があるから、という変態思考を、拳を握り締めて力説するのはやめて欲しい。お姉ちゃんは戦国時代も大好きだ。

『ん？そーねーGWには出羽国にいきたいなー』

『でわのくに?』

『あ、まだ習ってない?山形』

『・・・お姉ちゃん。お願いだから、現在の県名で会話して』

『いいじゃん。勉強になるねー』

『そうだね。でも珍しいじゃん、GWとか、人がわさわさ居る時に外出るの嫌いじゃないっけ?』

人ごみうざい。

それがプライベート時のお姉ちゃんの基本姿勢。仕事の際はスクランブル交差点も満員電車も涼しい顔でオールクリアだというお姉ちゃんにはオン・オフスイッチがついてるにちがいない。

『嫌いだけどね。でもGWは外せないんだよ。だって・・・謙信公が、あたしを待ってるんだもん!』

『は?』

『GWはね、上杉祭りって決まってるの。去年からホテルもとってるしー、毎年もすっごい楽しみにしてるんだあ今年も直江さんと写真撮らなきゃ今年こそ安田さんいるかな色部さんも去年はサービス良かったし』

『へー・・・』

うっとりと語りだしたお姉ちゃんに、しまった、と思った。お姉

ちゃんの妄想は止まらないのに、変なオンスイッチを押してしまったことに後の祭り。

どうやら戦国武将についてらしい蘊蓄をとりあえず聞き流しながら、何でこんな事になったんだっけと記憶を掘り返す。

会話の始まりは……ああ、そうだ。

『お姉ちゃん。謙信公の話はもういいよ。わかった。でも、旅行なら普通にそう言おうよ。トリップとか、どっかのタレントじゃないんだから』

会話しづらい、と妄想混じりで話をしてくるだけでもわかりづらいのこれに英語交じりの難解な日本語まで使われてはたまらないと口にした抗議の言葉は、夢破れて山河あり。

『あ、それは違うんだ。あたしが言ったトリップはねー、何て言うんだろ？行く先がとりあえず現代の地球上のどこでもない場合を指すんだわ』

『……はい？』

お姉ちゃんとの会話で絶対に交らずにいられない妄想ワードがきた。しかも新語だ。わたしは『BL』の意味を知った時の衝撃を思い出し、次のお姉ちゃんの言葉に備えた。

そして語られた『トリップ』に、わたしの脳は震撼した。

この世界の過去未来、もしくは異なる世界の、異なる時代。

今でない場所、ここでない、マルコ・ポーロでも宇宙船でもたどり着けない場所に、概念の中に、立つこと。

それが『トリップ』。

例えるなら中国は三国時代、日本なら戦国時代でヨーロッパは16世紀あたりが時代考証でお願いしたいという。

そりゃ誰も行けないよと突っ込んだ（この時はまだツッコミ全盛期だった）わたしに、お姉ちゃんは『妄想でならいける』と無駄にきっぱりと答えた。わたしも学校で先生に宛てられた時これくらい堂々と言いたい。『わかりません』と。

とにかく、わたしはその日『トリップ』という言葉を理解した。

お姉ちゃんの脳内でしか起こらない、びっくり現象、と。

それが今、我が身に降りかかっている現実。事実。

背中に感じるふかふかの感触。サラリとした布は、お姉ちゃんご愛用のシルクパジャマに似ている。

視界は暗い。音も、自分の息をする音しか聞こえない。

ぞくりと背筋をなでるのが、何のせいかはわからなかった。

ただ、いつの間にか訪れていた暗闇の中で、考えるのはお姉ちゃんのこと。・・・今日はお姉ちゃんの事ばかり考えている気もする。

普段は思い出すだけで疲れるようなエピソードしかないから極力記憶の隅に追いやっているのに。友達のゆっこに言わせると、これできてわたしは大したシスコンだそう。シスコンって案外ハードルが低いな。

実はわたし、現在進行形で目を閉じている。

瞼を通して感じる明暗が外の暗さを教えてくれたわけだが、だから目を閉じ続けているだけではない。目を開けたらお化けがいそうとかも思っているが、それだけではない。わたしのこわいものはお化けとお母さんとネズミだけど、今はちょこっとしかお化け怖い



とか思っていない。

怖いのは、現実だ。

ふかふかの感触　　ベット  
持っていない。布団派だから。

わたし、ベットなんて

シルクのパジャマ　　綿100%のスウェットがお姉ちゃんのお下がりだって気にしない。だってパジャマだし。

その、どちらもがわたしの世界にないもので。

お姉ちゃんのお言葉を反芻する。

『トリップ』

それを現実だ（……………）と感じたのは、いつだった？

ハロー。

ハロー、ハロー、お姉ちゃん。

こちらさなえ。現在お姉ちゃんのお妄想の海で遭難中。救援求む。

笑顔<sup>マイク</sup>仮面とはナイスではないトゥ・ミート、メイドさん（ベス）  
に拒否されたヘルプ・ユアセルフ。

この現実にはヴ・ア・ナイストリップで手を振って、お姉ちゃん。

悪夢のような現実がお姉ちゃんの妄想であれと願って眠りについて、お姉ちゃんが『うつそ〜』とか美人にあるまじき腹が立つ変ポーズで笑いながら言うてくれる夢を見た翌朝の、わたしの落胆は酷かった。

朝だ。

ふわりとした柔らかな感触に包まれて、大きな窓から差し込む陽光がきらめき、小鳥のさえずりに耳を和ませる、さわやかな目覚め。・・・であつてもよかつたはずだ。少なくとも冒頭ぐらいは。

「おはようございます、勇者様。朝食の御用意が来ておりますので、どうぞ〜支度を」

この人が一体いつからわたしの側で待機していたんだろうと考えると、窓ガラスを割ってやりたい気分になつたわたしの悪夢は続く。

わたしはトリップをしてしまった。

何度もしつこいように確認するが、わたしは、トリップを、してしまつたのだ。お姉ちゃんの妄想ではなく、わたしの悪夢で

もなく、現実として、わたしはわたしの知らない世界に居る。

なんてことだ。

改めて。改めて、認識した自身の現状に、わたしはテーブルの上に並べられた朝食に手をつける気にならなかった。

サラダっぽい葉っぱの皿も、スープっぽい透明な液体も、パンのような茶色い塊もたまごっぽい黄色のぐちゃぐちゃも、現実だと思いたくない。

じっとテーブルを見つめるだけのわたし。      そんなわたしを、

じっとみつめるメイドさん。

気まずいばかりの沈黙が部屋を支配し、胸どころか喉まで一杯になったわたしが諦めて口をつけたスープは表面だけが冷たくて、生ぬるかった。

異世界トリップには幾つものパターンがある。

そう語るお姉ちゃんの話も、もそもそと朝食を食べながら思い出していた。

お姉ちゃんが憧れているのはまず、漫画や小説なんかの“知ってる”世界に行くタイプのトリップ。好きなキャラとキャツキヤウふふな生活をしたり、あの子（ ）とこの子（ ）をくっつけたり、物語の中でお姉ちゃんが嫌だと思った場面を変えたりしたいらしい。因みにこれを“有知トリップ”“原作改変”という。心底どうでもいいし、お姉ちゃんは腐ってる。

で、興味はあるけど現実になるのはちょっと・・・と、好きだけど妄想だけでお腹いっぱいとお姉ちゃんが疲れたように言っ

たのが、異世界トリップ。

全く知らない世界、誰も知らない国が舞台の、若さナシでは生きられない過酷な現象。つまりは、お姉ちゃんはもう若くないから知らない場所で頑張つてと言われても頑張れるかー！ということらしい。妄想以外で頑張るつもりはないらしい。

この異世界トリップ、バリエーションはとにかく豊富で、お姉ちゃんも語った中でわたしが覚えている分だけでも十以上ある。

まずは王道、世界を救う救世主的な何かパターン。

これをさらに細分化してみると、異世界トリップの概念が産まれた時からおそらく主流だった、勇者様。この仲間に巫女やら女神やら、何とかの乙女がある。

どこかの国で何らかの問題が起きていて、それをぱーっと解決するのが話の基本で、ハッピーエンド以外の結末は存在しない。

同じく根強い人気を博したのが、生贄として竜だか神だか悪魔だかに捧げられるポジションで、それを回避するストーリー。主人公の知恵と勇気と時の運とかが試される。こちらもまた、大抵はめでたしめでたし。

これらに対して最近台頭してきたのが、勘違いモノや傍観モノ、正義ではなく悪の味方なんですよバージョンに、転生なんて事も起きる。

勘違いモノはその名の通り。ある日突然トリップしたら あ、間違えましたあなたじゃなかったみたいですがでも帰せませんどうしましょう。フザケンナって話だ。

ちよつと違うニュアンスで、やることなす事いい方向に曲解して受け止められ、あれよあれよと言う間にすごい人認定されてしまう運命のいたずらにも程がある話。これは他のルートとも併用できるらしく、出来れば併用したくないわたしの願いはお姉ちゃんに届く

だろうか。

で、傍観つていうのは、トリップしたけど、特に何も起きない・起こさないこと。

誰かが迎えに来るわけではなく、国が何らかの脅威にさらされてる風でもない。私は一体何しに来たの？ふつーにパン屋とか喫茶店とかで働いちゃうけど、いい？実はちゃんと勇者とかの役目があるのに何かの偶然が重なってのんびりしちゃうタイプ。

もしくは、ヤベー召喚されたっぽい冗談じゃないあんた等の為に命なんてかけれるか勝手に頑張れ勇者？そんな人知りませんこちとら単なる村人Cですけど何か？

傍観をやるのはある意味勇者になるよりツワモノと、キワモノのお姉ちゃんと言った。

そして悪の味方の代表格、いらっしやいませ、魔王様　そんな冗談みたいなお迎えが来たら追い返したい。宗教の勧誘なら、間に合ってます！！

生まれ変わりって信じる？死んだと思ったら生きていて、なぜか赤ん坊でした。しかも結構いい所の娘か息子。前世の記憶のあるわたしは、体は子供頭脳は大人　それって得してない？人生二回とか、かなりお得。って思った当時のわたしは馬鹿だ。今だからわかる。大馬鹿だ。

『知らない』と認識できる思考があつて、『知らない』場所に立つ事はこんなにも怖くて心細いの。

ここまでを思い浮かべて、わたしはおそらく『勇者』ルートに乗ったのだらうと結論付ける。周りがわたしをそう呼ぶのだから、おそらくではなく確実だろうが。

朝食後、ぽつんと部屋に残されたわたしは改めて自覚した自身の状況に深いため息をついた。

「『勇者』とか……最悪」

思い至った結論は、正直、もっとも回避したいパターンだった。出来たら魔王の立場で呼んで欲しかった。そうすれば世界の二つや二つ、国の十でも二十でも迅速に滅ぼしてお役御免を狙うのに。

「なんでよりもよって、こんな面倒なものに当たるかなあ」

お姉ちゃんの話思い出す。

『勇者』ルート。

それは、思い出したくても思い出しきれない程複雑に枝分かれしたストーリーの代名詞。

「勇者……まず、ここはお城みたいだから、わたしが乗ったのは『王族』ルートで、この世界は剣があるから『修行』コマンドが発動するでしょう？」

ぶつぶつと、記憶の底から攫うようにして思い出す、お姉ちゃん

の言葉もとい妄想。駄々漏れにも程がある独り事でさえ、今のわたしにとっては貴重な情報なのでそれも思い起こそうと試みる。

昨日視界の端々におさめた人達は皆一様に腰に剣を携えていた。今わたしの部屋の前に立っている人も、甲冑プラス剣という見事なコスプレっぷりでお姉ちゃんが見たらフォルダに納まりきれないくらい写真をとりそ・・・うなのは、今は置いておこう。

気を取り直して。

「でも『勇者』ってことは、独特の技？みたいなものがある可能性が高いし、一番可能性が高いのは魔法だろうけど・・・」

お姉ちゃんだったら大喜びで呪文とか唱えそう。あの年で低年齢向けの美少女戦士番組とか見てる人だし。エンディングダンスは完全にマスターしたよって、誇らしげに言っちゃおう人だし。

「・・・お姉ちゃん」

いって言うてるのに歌って踊り始めたお姉ちゃん。お姉ちゃんは運動神経が良いし歌もうまいから、その歌と踊りを知らないわたしでもつい見入ってしまう出来だった。お姉ちゃんの格好がスウェット眼鏡ノーメイクだったのはいただけないが。

踊りの最後に決めポーズらしき体制で静止し、ウインクまでつけたお姉ちゃんに本当は馬鹿なんじゃないだろうかこの人と我に返ってげんなりした。

そんな馬鹿な日々が、今は恋しい。恋しすぎて、泣きそうだった。



「…………お姉ちゃん」

ぐつと、下唇をかみしめる。息も止めて、体中に力を入れて、涙をこらえた。

泣いたらきつと、わたしはきつと、この悪夢に呑みこまれてしま  
う。そんな気がしたから。

## 2-2 勇者ルート

わたしはトリップをしてしまった。シュチュエ ションは『勇者』。

危険の代名詞、面倒事の同義。そもそも一女子高生になんて無茶ぶり、日本最難関の大学に合格しろと言われた方がまだ現実味があるし頑張れる。

しかし、出来ない無理だと嘆く事の無意味さをわたしは重々承知している。

そしてあがこうにも、わたしは自分が『勇者』以外の選択肢を得ることが絶望的だというある種の『ルール』を、知ってしまったている。

それは、トリップ形態は多々あれど女子高生の勇者ルートほど強制力のあるシナリオも他に類を見ないと、あのお姉ちゃんが言いきったからだ。

『勇者』ルートに乗ってしまった人間の行動ひいては運命は、年齢・性別によってパターン化されている。(お姉ちゃんの無駄知識より)

まず、男性で学生の場合。

いらっしゃいませ、勇者様。ご主人様とは遠くて近い。男の子は戦隊モノとかヒーローショーが好きだから、本能的なものでなんだ

かんだと勇者になり、例外は存在しないといつてもいいそうさ。

次に、男性で社会人以上の場合。これまたおめでとうキミは今日からこの世界を救うヒーローだ。嫌よ嫌よも好きのうち、クールぶつても傍観者ぶつてもなかなかかなりきれいだから男はいつまでたつても子供なんだまあそこが可愛いんだけどねと舌舐めずりでもしそうな表情でまくしたてたお姉ちゃんのこととは記憶の底に封印しておこう。今は関係ない。叶うのなら、一生関係を結びたくない。

で、スーツがリアル戦闘服になって最強の装備認定される日が来るかもしれないとか何とかかんとか……。ちなみにお姉ちゃんの好きな男性の服装ベスト3は白衣・スーツ・作業着だ。コレが社会人バージョンで、未成年版と年配版もちゃんとあるらしいけどわたしは女子高生の純潔にかけて残りの六つには断固として耳をふさぐつもりでいる。知ったら何かが終わりそうさ。

とまあ、男の場合は特に違いはない。基本的に嬉々として勇者になつてしまふ。嬉々として。

年齢の違いによるシナリオの差異を強いてあげるなら、アダルト度？とルートとは関係ないけどメインの要素を細かく、真剣に語りだしたお姉ちゃんとそれを聞く未成年なわたし。これ、強制わいせつとかならないかな。

問題は、女性の場合。真剣に思い出さなくてはいけない。なんせ、自分の身にかかることだ。

女性で社会人の場合というのは、男性の場合と話が変わるんだ、たしか。それはおそらく女性の方が男性よりもトリップ願望が強いため、やりたい事もなりたいたい自分も際限なく妄想できるからだろうと整然と語ったお姉ちゃんを、内容が内容で尊敬も出来ない。問題の社会人女性のトリップは、最も現実的な道をたどる。

勇者？ 無理。他当って。

世界を救う？ こっちの年齢考えて。

役立たずは消す？ 好きにして。でも、タダでは消されてあ

げないヨ。

開き直りというか、したたかというか、女性は強い。

お姉ちゃん曰く。

『一回社会に出ておくと人間どこでも生きていけるってことがわかるから、見知らぬ場所で放り出されてもなんとかやっていっちゃうから平気なんだよ可愛くないよねーだから最近干物女とかが流行るんだよ。変に現実知っちゃってるから、ゆめに夢を見れないなんて本末転倒だよー。いつぺんでいいから男に泣いてすがってみたい』捨てないで』とか『行かないで』とかうわ自分で言ってるって気持ち悪い』

うげっ、と顔を顰めたお姉ちゃんを見て、わたしはひもの女にはなりたくない、なるまいと心に誓った。可愛い奥さんになりたいな。

さて、女で学生　つまり、わたしの場合。結論から言おう。

わたしは、勇者になる。しかない。

それが世界の法則、とやや大げさに表現されたことを覚えている。女子高生は勇者だろうが女神だろうが聖女だろうが、トリップ先で与えられた役目から違える事は出来ない。出来ないのには理由があつて、そもそも、あらがう、という事をしないうちにあれよあれよと状況が出来あがってしまったって、逃げられなくなってしまうのだそう。そうすると不思議なもので、世界は彼女の味方、行動も言動も全てが良い方に転がり、立派な救世主へと成長をするという・・・

「冗談きついよ、お姉ちゃん・・・」

心の底から、このアメリカなジョークをH A H A H Aと笑い飛ばして欲しい。お姉ちゃんはモノマネもうまかったから、陽気なアメリカンの真似とか朝飯前のはずだ。・・・本当に、あの人の特技は美人にあるまじきモノが多い。

わたしはくたりとテーブルに突っ伏した。ひんやりと冷たい感触が額にあたる。現状把握にいつもより多く使った頭が少しだけ冷えた気がした。

でもそれは『気がした』だけで、少しの余暇もなく、再び巡り始める思考。

わたしはどうかして、勇者にならずに速やかにこの悪夢から目覚めたい。その『どうか』を考えつくにはわたしの頭の仕様が適したのではなく、やはりお姉ちゃんの妄想からヒントを得るしかないのだ。

「勇者・・・勇者、回避する方法・・・」

ヒントはある。『社会人の女性』パターンを参考にすればいいのだ。何を言われても拒否・拒絶・却下。

断固とした態度で何もしない！とふんぞり返る・・・あ、何だろ  
うお姉ちゃんの幻覚が。そうそう、あんな風にふてぶてしく・・・  
・・・出来たら、こんなに悩んでない。

女子高生にアラサ の精神力は無理だよ、お姉ちゃん。  
死ぬの怖いもん。普通に怖いもん。

それに、ここの人達ってなんか・・・わたしのこと、見下してる？カンジが、するんだよ、ねー。特に笑顔仮面王子とか。わたしの意見なんてはなっから聞く気もない、みたいな。

……あれ？

「これってもしかして……」

ふと頭に浮かんだ考えは、ルートの初期設定の一つ。『勇者』とは違う話、ルートに関係なく起こりうる、おまけ設定。

お姉ちゃんがこの世に存在しなかったらきつとわたしが一生耳にする事のなかった単語。

「『嫌われ』って、やつ？」

コンコン。

呟いた言葉にノック音が重なり、わたしは唯一の逃げ場から現実  
に引きずり出された。

「おはようございます。ご機嫌はいかがですか。勇者殿」

わたしの返事を待たずに開いたドアから顔を出したのは、笑顔仮面王子。今日も笑顔を張り付けて、胡散臭さが標準装備。

「おはようございます。そうですね、あまり思わしくはありません。どうやらこちらの国ではノックさえすれば返事も待たず女性の部屋に乱入しても良い風習があるようで、文化の違いが精神的な負担になっているみたいです」

王子の顔を、というか声を聞いた瞬間に全身から拒絶反応が出た。この人嫌い。怖い。

でも口から出るのは挨拶代わりの嫌み。いや、挨拶もしたけどね？自分が恐怖で饒舌になるタイプだと、ここ二日で初めて知った。それにしても、よくこんなつらつらと言葉が出てくるものだ。我がことながら感心する。お姉ちゃんとの修行（会話）の賜物だろう。これが吉と出るか凶と出るか。

「それはお気の毒な。しかし、勇者殿は最早我が国の人間、こちらの作法に慣れていただかなければ困ります」

出たのは、笑顔のこり押しだった。わかつてはいたけど。凶以外のどんな目も出るはずがないこと。

にしても、やっぱりふに落ちない。

勝手に呼んでおいて、こちらの都合も聞かず非難し、脅しまでも。何て理不尽。こいつに人間の心はあるのか。いや、無いに違いない。

「・・・昨日も言いましたが、わたしは、勇者なんかじゃありません。この国の為に指先一本動かすつもりはなく、髪の毛一筋提供する気はありません」

そんな怖くて理不尽な人間の皮を被った何かを相手に、しがない女子高生にしては頑張ったと思う。声も震えてなかったと思う。手は・・・ちよつと、うん。右手が左手を、左手が右手を抑えている状態だが。

でも、ここで頑張るのをやめたら、わたしは本当に『勇者』になつてしまう。家族も友達もない、何の関係もない国の為に命をかける存にならされてしまう。そんなの嫌だというか本当に無理。だつてわたし、頭は悪くないけどお姉ちゃんみたいによくもないし、運動神経だつて壊滅的ではないけど何かに秀でることが出来る程よくもないし運は絶対悪いし（なんせ異世界に召喚されてしまうほどだ）、そもそもヤル気が無い。

最初は、トリップ混乱してお姉ちゃんの教えが頭の中を駆け巡っていた時は、条件反射で全否定していたが、今は違う。



「一晩寝て起きて考えて、勇者になりたくない理由が出来た。」

「そのようなご心配なさらずとも、勇者殿はその身全てをわが国の平和に捧げていただければよいのですよ」

「・・・誰が、」

だから、無理だから嫌だからと何回言えばいいのか。

「本日は、勇者殿もお疲れの御様子ですのでどうぞこの部屋でこゆっくりおくつろぎください。テーブルの上の呼び鈴を鳴らしていただければお世話の者が参りますし、お望みの物を揃える様申しつけています。ただ、部屋の外に出る事はお控えください。良からぬ者が寄って来るやもしれませんので、勇者殿の恩身のためにも」

「ちよつと、わたしの話を・・・！」

その『良からぬ者』が今のわたしにとってはお前だと、全力で抗議したい。

「それと、明日からの予定をお伝えしておきます御朝食後は我が国の歴史や伝承に関する講義を受けていただきます。ご昼食後、休憩をはさみ剣の稽古。これには指導役として我が国最高位の将軍をお付けします。夕方からは我が国に伝わる『勇者』としての資質を磨く儀式を」

「は!?!」

「ああ、最後に。魔王討伐の日程が決まりました。今より一月後、精鋭300をつれ、出兵していただきます」

「え、まあ、」

魔王つて、はあ?何ソレ聞いてない!ますます無理だよ、だって魔王つて、魔王つて、ラスボスじゃん!?むこうで言うところのお姉ちゃんじゃん!(混乱)

つかしよっぱなから魔王つて、もったいぶって最後に出してよそーゆーのはさあ!!それでもどうにもできないけど!けど、でも・・・!

「来る日までに、どうか国を救うにふさわしい智と力を身につけて下さいね・・・』勇者殿』」

言うだけ言って、にっこりと笑みを深くした笑顔仮面はわたしが何かを言う前に部屋を出て行ってしまった。

残されたわたしはというと、怒り過ぎてもう意味がわからないカンジになっていた。

何なんだ。

何なんだ、一体。

なんであいつにはこんなにも言葉が通じない?いや、言葉は通じ

てる。通じてないのはわたしの意志。出来てないのは意志疎通。

疎通させるつもりがあちらにないのが、わたしにだけ伝わっているって、何て不公平!!

こいつ（等）の為に、何でわたしが命なんぞかけなくてはならないのか。

朝から抱えていたもやもやが、今この瞬間にその気持ちが一〇倍ぐらい膨れ上がった。

あんだホント、人の話を聞こうよ!!

わたしの言葉が届くなら、このセリフを叩きつけてやるのに。

『勇者』なんてある意味特権階級な立場でやって来て、そう呼ぶくせに個々の人達はわたしに対する態度が酷い。これはわたしの被害妄想でも我がままでないはずだ。誰に聞いたって十人中十人が共感してくれるはずだ。

それに、お姉ちゃんはやったのに。『勇者』ルートは、基本的に『逆ハー』だ、って。

『逆ハー』ってというのは、逆ハーレムの略。

まず、ハーレムっていうのは男性が複数の女性に囲まれて鼻の下を伸ばすこと。

で、逆ハーレムは、言葉通りハーレムの逆、女性が男性に囲まれて涎を拭う事だ。と、お姉ちゃんが。

異世界トリップにはもれなくついてくるオプションで、勇者なんてルートになった女子高生はやれ王子だ將軍だ騎士に兵士に偶然出

会った村人Aにと好かれて好かれて困っちゃう現象が起きるらしい。

It's a paradise!!

こたつから這い出て立ち上がり、お姉ちゃんは叫んだ。小声で。器用な人だ。

キャバクラが男性の癒しなら、ホストクラブは乙女の花園。ちやほやされて嫌な気分になる人間はそうそういない。しかも相手がイケメン揃いだったら鼻血モンでしょう女として、がお姉ちゃん的主張。

よくわからなかった。男の人、しかも知らない人に囲まれるなんて・・・緊張するだけじゃないか。

わたしは中学の時も高校に上がってからも、好きな人はいたけど告白なんてしたこともなかったし、されたこともなく、誰かとお付き合いをした経験も皆無。関わり合いのある男子なんてお父さんか先生かクラスメイトぐらいだし、友達も女の子ばかりで、進んでる子みたいに他校生と遊んだりもした事が無い。

・・・というか、コレはお姉ちゃんが100%悪いと思うんだけど、わたしのなかで『男の人』お姉ちゃんの妄想の餌食』みたいな感覚があつて、下手にちよつと格好イイなつて人とか見ると・・・

・・・ほら、あれだよ・・・察して！

おかげでわたしの好きな人、絶対友達から『地味』って言われちゃうんだから！！だつてそういう人しかお姉ちゃんの中で無事ではいられないんだもんしょうがないじゃないお姉ちゃんが出張つて来るんだもんわたしの頭の中までさ！中学あがる前からわたしの脳みそはじわじわ侵略されてたんだお姉ちゃんめ・・・！！あの笑顔仮面王子のことだつて、怖いって思うけど心の底から思うけど頭の片隅がお姉ちゃんを出してくるからなんか微妙に平気で困るんだよあこれが『困っちゃう』ってやつ・・・って、違う！！

・・・あー、っと。  
気を取り直して。

そう、それに、好きという感情に気恥かしさもある。お姉ちゃんみたいに自分の世界の中心で愛を叫んでる人にはわからないだろうけど。

そんなに沢山の人に好かれて、それが楽しいって、なんで？って別に好きでもないクラスメイトの男子と話すのだってちょっと緊張するの。 たった一人を好きになるのさえ大変で、心臓が煩いぐらいドキドキするのに、その人の前に立つと言葉も覚束なくなるくらいなのに。

本気で、『困っちゃう』と思うんだ。なのに、お姉ちゃんの言い方だと『困っちゃう』のがいいみたい。

なんで？

困ってるのなら、ちゃんと困ろうよ。今のわたしみたいに、全力で。

本気でここから逃げたいくらい追い詰められてるけどその先を考えると身動きがとれないっていう真の困惑者はわたしだよ？困っちゃうとか言ってる場合じゃないよ。『ちゃう』とか。どんだけ余裕だよ。

大人の女の人って・・・いや、お姉ちゃんって、やっぱり意味不明。いつかわたしも『逆ハー』に『困っちゃう』ことに胸躍らせる日が来るのだろうか。

一生遠慮したい。

はい、思ってますよ？『逆ハー』とは一生無縁でいたい、って。今も昔もこれからも、この考えはかわらないだろう。

そんなわたしにしてみれば、まさかの異世界で初『逆ハー』体験とかならなくてよかったと心底思ってもいる。

思っては、いるけれど。

だからって『嫌われ』を用意してくれなくてもいいじゃない。

固く閉ざされた扉を見つめて、わたしはぎゅっと目を閉じた。

瞼の向こうに映ったのは、『逆ハー』を語る以上の輝きをもって嫌われ』について熱弁する、お姉ちゃんの姿だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4762q/>

---

トリップ・マニュアル

2011年2月6日21時13分発行